
ボクの起源（改定）

磯田 大二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクの起源（改定）

【Nコード】

N0724Z

【作者名】

磯田 大二

【あらすじ】

今あるボクの起源は何だろうか。昔を思い出しながら探す。

ボクは昨年脳出血で倒れた。まさに崩れ落ちるように畳の上にならずくまった。そのまま二週間の治療入院。そして、リハビリ病院へ三ヶ月。退院してからもう一年以上経つ。退院したばかりの頃を思い起こすと随分元気になった。しかし、まだ目眩は続いている。

今は、入院中に思い出さなかったことが少しずつ意識にのぼってくるのである。しかし、まだ、頭は正常とはいえない。

記憶をたどってみる、どんどんさかのぼり、これ以上は戻らないところにつつすらと画像が見える、三歳ごろかもしれない一瞬の場面だけが頭に浮かぶ。なぜかそこにはボクの姿が映っている。あったことが記憶の回路に保存される時に自分を客観視する形でファイルしているのだろう。

もう少し、動きのある映像のところに記憶を戻していく。四、五歳のころだろうか、そこにも、ボクの姿が映っている。オフクロに連れられて映画館にいる。ドリス・デイの「ケセラセラ」が聞こえてくる。When I was just a little girl I asked my mother what will be と、きれいな歌声がよみがえる。

少しずつだが昔の記憶に、新しいことが上書きされていくような気がする。遠い過去の画面の色が薄くなってくる。輪郭もハッキリしなくなってくる。

臆病で怠け者。不誠実で狡猾なボク。過去の積み重ねが今のボクを創ったのだろう。

今のボクは過去のどの場面により多く左右されているのだろうか。このまま放っておくと、消えてなくなってしまうので此処に書き記しておこう。

第一章 ボクと家族たち

(一)

「何だつて言うの。泣いてばかりで分んないわよ」

「はんぶんのは、いやだ、まるごとがいい」

オフクロが、敷布団の上で泣いているボクを、布団を畳みながら床の上に転がした。ボクはゴロンと布団から床の上に転がった。

四歳だった。朝、起きて布団も畳まずに皆で朝飯を食べていた。食事が終わり、イチゴを出てきて皆で食べようとしていた。

その頃にはデザートなんていう言葉は無かった。今のようにパツクに入つてはいなくて、三、四センチの高さの木の箱にきれいにイチゴが並んで入っていた。その空き箱に土を入れてそこに朝顔の種を蒔いて育てたものだった。

ボクとオトウトの分は食べやすいようにオフクロがイチゴを半分に分けて器に入れてくれた。それに砂糖と牛乳をかけ、スプーンでつぶして食べるのだ。器の中はきれいなピンク色になる。美味しいものだった。ボクはスプーンで潰そうと器を見るとイチゴが半分に切つてある。これは嫌だった。大人のようにイチゴを丸ごと入れて欲しかった。それで叫んだ。

「イチゴ、半分じゃ嫌だ。丸ごとくれ」

オフクロ怒つた。ボクの言つた丸ごと、とはイチゴ一箱のことだと思つて「イチゴは皆で食べるの」と烈火のごとく怒つたのだ。そのとき、ボクにはオフクロが勘違いしていると分かつたのだ。だから、また言つた。

「イチゴ、丸ごと、半分は嫌だ」

オフクロは更に怒つた。何しろ思い込んだら一直線なのだ。どうにかして分かつてもらいたいとボクは必死に叫ぶのだが、あの頃のボクにはこれ以上適切な言葉は浮かばなかった。

「イチゴ丸ごと」と叫ぶしかなかった。

頑固な意地っ張りの子どもということになつてしまい、そのとき

はイチゴを食べさせてはもらえなかった。今でも昨日のことに覚えている。

思い込んだら一直線のオフクロの話はいくらでも出てくる。

ある日、アニキの机がゼンゼン整理されていなくて、オフクロは怒った。でも、昨日も一昨日も汚かったのに、そのときは何も言わなかった。それなのに、突然、怒り出した。

「この机、なんでこんなに汚いの。何とかしなさい」

「今から友達のうちへ行くから後で片付けるよ」

「いまやるの。」

そうになると、もう止まらない。多分、自分の言葉に更に興奮してくるのだろう。机の上の物を窓から外に放り投げた。それでもまだ気持ちが収まらないらしく、今度はその机も外へ放り出してしまった。

アニキは呆然としてそれを見ていたが、しばらくして、庭から机を部屋に入れて、片付けていた。

またあるときは、アニキが泣きながら帰ってきた。オフクロがどうしたのか事情を聞くと、どうも喧嘩をして負けて帰ってきたらしい。事情が分かると、いきなりオフクロの怒りは爆発する。

「喧嘩で負けて帰ってくるんじゃない。もう一度行ってやつつけてこい」

オフクロの怒りにアニキも仕方なくもう一度出かけていった。その結果はどうなったかは覚えていない。

あの頃のボクは天才だった。まだ就学前。幼稚園にも入っていないかった。家の壁には世界地図が貼ってあり、その周りには世界の国旗がいっぱい書いてあった。まだ文字が読めなかったので、その下に書いてあった国名は読むことはできなかった。しかし、ボクには全ての旗の国名を言い当てる事が出来たのだ。オフクロは鼻高々だった。お客が来ると、ボクは呼ばれて、壁の国旗を指して国名を

言わせられた。

「この旗はこの国」

「それは、イタリア。ながぐつみたいなかッコしているくにだよ」
ボクもいい気持ちであった。自分でも、分かるのが不思議だった。
ボクは頭がいいのかな、なんて思っていた。

オフクロもお客の前でニコニコと笑顔だった。

子どもの親になった今、どこの子どもでも、皆、小さい時は何かの天才だと思う。スーパーカーの名前なら何でも分かる子、怪獣のことは全て知っている子など、いろいろいた。走るのがとっても速い子、大きくなったらオリンピックの強化選手になるのでは何て思っていたのに、今は太ってしまった。子どもは皆、天才だ。それがいつの間にか普通の人になってしまう。

子どもの時天才だったボクは、今記憶力がとっても悪い。リハビリの時「心理」の先生に、

「あなたは記憶のキャパシティがとても少ない」と言われた。

「先生、でもこれは訓練で良くなりますよね」と言うと、

「うーん……。メモを取る習慣をつけなさい」なんて言われてしまった。

今日も、知り合いの奥さんがやっている喫茶店へ行った。最近、物覚えがとっても悪くなった、と、他のお客さんとも話していた。

「この間も電話で友達から頼まれごとがあつて、会う日を決めたのだけど、後でメモしようとしていたら、そのうちに日にちを忘れてしまつて、こまつたよ」

こんな話をして、皆で大笑いをしていた。さんざん笑つて、もう帰ろうとお店を出て、バスに乗った。バスの中で何か変だなと思つたら、お茶を飲んだお金を払っていなかったのだ。家に帰ってから、電話で明日にでも払いに行くからと言うと、その奥さんもゼンゼン気が付いていなかった。

その頃に住んでいた家は鎌倉駅から十分位の大町にあった。庭が

広く、三角ベースぐらいは出来た。コンクリートで作った池が三つあり、水は入れていかなかったが雨水が下のほうに少し溜まっていた。建物は平屋で古かったがボクたち家族が住むには十分な広さだった。庭の奥のほうには井戸があり、そのすぐ横には犬をつないでいた。うらにはイチジクの木があり、毎年沢山の实がなり、もう、食べ飽きていた。

食べ飽きてボクはイチジクなど見るのも嫌なとき、オフクロはイチジクをジャムにしようと、裏庭に七輪を出して煮ていたことがある。

家中がイチジクの匂いになるので外で煮ているのだな、と思っで見ている。しかし、オフクロは水を入れすぎて、外で煮詰めていたようだった。

だいたい、オフクロは作り方をきちんと確認したりしない。すべて、勘でやってしまう。だからといって、料理が上手とはとてもいえないのだ。そもそも、オフクロの料理というのは切るのか焼くのである。煮物などめったにしないのだ。ボクには、大騒ぎでジャムを作っていた記憶だけで、そのジャムを食べた記憶は無い。

ボクは今でもお使いに行ったりごみを出したり何の抵抗も無くしている。話に聞くとお使いなど男がするものではない、などと言っている人もいるらしい。

先日、友人の奥さんと話していたら、「私、主人にゴミだしだけはさせられない」と言っていた。我が家では全く無縁の言葉だった。妻に聞かせてあげたいと思わないではなかったが。

こんなことが今でも抵抗無く出来るのは、この頃からお使いに行かされたからだろう。

家から歩いて七八分のところにパン屋さんが在った。そこによくお使いに行った。お金を預かって、パン屋さんにつくと、「食パン一斤下さい。八枚に切ってください」いつも、ガラスケースから顔を出すように言っていた。パンを持って意気揚々と帰るとオヤ

ジモオフク口も大喜びをして迎えてくれるのだ。それが嬉しくいてもパンを買いに行っていた。

その食パンは耳がカリツとしていて中は柔らかくてとっても美味しいパンだった。その味は今でも忘れない。しかし、そのパン屋さん、今はもうなくなってしまった。

内気で友人のいないボクの処にときどき遊びに来てくれる子がいた。女の子だった。ミーちゃんと言った。オフク口は内気なボクと一緒に遊べるのは、乱暴な男の子ではいけないと考えて近所の女の子に声をかけたようだった。

ミーちゃんが来るときはたいがい友達の子を連れてきた。そして、いつも、おままごとをして遊んだ。ボクは男なので、小父さんとか、お父さんとか、をやらされていた。

何の時だか覚えていないが、おままごとの小さい器に水を入れなければいけないで、ボクは池の水を汲もうとした。でも、下のほうにしか水が無くて、手を伸ばして汲もうと、下のほうに一生懸命伸ばしたのだ。子どもは頭が重くて体には力が無い。ボクは特にそうだった。そのまま、池の中に頭から落つこちて、頭をコンクリートにぶつけてしまった。

ボクは頭を切ってしまった。大騒ぎになり、お手伝いさんが助けられて、頭を消毒してくれた。でも、大分、切れていたのだから血が止まらなかった。丁度、そんな時、オフク口が珍しく早く帰ってきて、また、大騒ぎ。結局、自転車の後ろに乗せられて、近くの病院で頭を縫ってもらったのだ。

かくてボクは、おままごとで、頭を縫う怪我をした情けない子どもになってしまった。それ以来、池を見ると何だか頭がうずうずとする。

我が家に飼っていた犬は「プー」と言う名前だった。生まれたばかりで貰ってきた。何でこんな変わった名前かというと、親が「ピ

「」だったからなのだ。

貰ってきた時は小さくてとても可愛い犬だった。この頃には犬を今ののように、家の中で飼うという習慣は無かった。それでもしばらくは、机の脚に紐を縛って廊下に置いていた。ボクたちは可愛がるばかりだったが、オフクロは食事を与えたり床に布を引いてあげたりと世話をしていた。

人間と違って犬というのはみるみる大きくなっていく。ボクはあつという間に追い越されてしまった。

オフクロが家の中の掃除をしていると、縁側の外からオフクロに背中押し付けてくる。背中を箒で、ブラシをかけるようにこすってもらうのが大好きなようだった。それに、いつも食事をくれるオフクロにとっても慣れていたようだ。

少し変わっているのは名前だけでなく、気性も凄く荒かった。誰かが勝手に庭に入ってくると吼えて噛み付いた。時には鎖も引きちぎって人に襲い掛かる。だから、皆、門から声を掛けるのだ。しかし、うちの庭は広がった。三角ベースなら出来たぐらい広いのだ。だから用のある人は、門のところから、必死になって大声で呼んでいた。

こんな犬だったが家族には決して噛み付かない。優しく良いやつだった。小さかったボクに噛み付くことなど決してなかった。ただ、鎖を持って歩くことは出来なかった。凄い力で引きずられてしまうのだ。

こんな犬はうちだけではなかった。隣の犬も凄かった。隣との境は、トタンの塀で仕切られていたのだが、その塀越しに年中喧嘩していた。

この頃の犬はみんな気が荒かったように思える。よく、街中で飼い主と一緒に散歩している犬同士が喧嘩しているのを見かけた。街中には野良犬もたくさん歩いていて。だから、飼い犬だって強気で喧嘩が強くないと生きていけなかったのかもしれない。

あるとき、「プー」は鎖をちぎって隣に勝負をしに出かけた。ト

タンで出来た塀なのだが下のほうは錆びていて、両方の犬がそこに突進するので破けてしまったのだ。

隣へ戦いに出かけた「プー」を見つけたアニキは生きいきと、目を輝かして、はしごを塀にかけて上からパチンコで「プー」を応援していた。

戦いぬいて、「プー」は意気揚々と相手の犬を負かして我が家に戻ってきたのだ。しかし、こちらも傷だらけだった。特に耳が千切れそうになっていた。でも、「プー」は痛そうな表情など微塵も見せず、胸を張っているようにも見えた。

この勇姿にアニキは大喜びをしていたのは今でも忘れられない。

このアニキはボクより九つも上なのだ。九つ違うと言うことは、ボクが小学一年生のときには高校一年生という事なのだ。今よりも当時のほうが歳の差を感じた。

中学校では柔道をやっていた。それほど強いわけではなかったのだが、何年か後にバイクを運転していた時、タクシーに跳ね飛ばされたことがあった。そのとき飛ばされながら空中で上手く回って、地面に足から着地をして立ってしまった。そのお蔭かどうか軽症ですんだのだ。本人は柔道のお蔭だと言っていた。ボクもそう思う。

アニキは、よくボクやオトウトと遊んでくれた。本を読むのも凄く好きなアニキだった。ボクが本を読むのを好きなのもアニキの影響が大きいと思っている。

こんな、「プー」も数年した頃から、顔のひげも眉も白くなったように見えて、いつものように、ボクたちにニコニコと愛想を振りまく姿にも、歳を感じてきた。そして、フィラリアにかかってあげなく死んでしまった。

オフクロは可愛がっていたのでガツクリとしたのだろう。でも、そんな姿は見せず、「プー」を戸板に乗せると、仏壇の前に運んだのだ。そこで、「プー」の葬式を執行したのだ。今は葬儀屋さんも動物の葬式をやってくれるのだが、この頃、ボクには犬の葬式をするなんて想像も出来なかった。

何かあると、大騒ぎをするオフクロだが、ときには笑顔で、ボクの手を優しく包み込むように、なでてくれた時もあった。そのときの様子もぼくの記憶に今も、しっかりと刻まれている。

(二)

普通、勤めているよりもっと稼いでやるぞ、というのが自営なのではないか。オヤジは何処か違う。むしろ、勤めているよりも好きに遊べるから自営なのかもしれない。

少しお金が入るとすぐに遊びに消えてしまったようだ。しかし、仕事を取ってくるのはとても上手だった。

米軍の人からの仕事を良く取ってきたようだ。その頃は一ドル三百六十円である。アメリカ人は日本に来れば贅沢が出来た。アメリカ人からの仕事は優良物件であった。

「アナタノ ツクツタ イスカバー ピッタリデ ヨイネ。ホカノ イス モ ヤツテクレヨ タノムネ」

日本人は、カバーは少し大きめに作って欲しいようだった。洗濯して縮んでも良いようである。ところがアメリカ人はピッタリでないといけない。

オヤジはアメリカ人が喜ぶコツを知っていたようである。これは習ったことではない。戦後、米軍放出品を上手く手に入れて、さんざん儲けてきた中に覚えたようだった。

この日もメアリー夫人に気に入られ、仕事を貰ってウキウキとしていた。こんな時に人間は油断するのである。

オヤジは突然、トイレに行きたくなった。昼に食べた刺身があまり良くなかったようだ。メアリー夫人にトイレを借りようと声を掛けようとしたが、二階に行ったらしく、近くに居なかった。まあ良いかと、目の前のトイレに入り用を足した。スッキリしてトイレか

ら出てくると、丁度メアリー夫人が目の前に居た。

「ちよつと、トイレを借りました」と挨拶をしたのだが。

「ソコニハイツタカ。アナタハ ソコハダメ。ソコハ ワタシダケ」
怒鳴りつけるような勢いで、まくしたてた。

オヤジは、初めは何のことだか分らなくてポカンとしてしまったが、どうもメアリー夫人専用のトイレでご主人にも使わせないトイレだったらしい。

必死に謝ったのだが許してもらえない。結局、トイレをきれいに洗うことになったようだ。それから一時間以上かけて便座は本より便器の中まで手を通す込んで洗わせられる破目になったようだった。オヤジはそんな失敗もしたが、アメリカ人とは上手く付き合って仕事も沢山貰っていたようだった。

ボクは、オヤジは不思議な人だと思った。ついこの間までアメリカと戦つて、随分苦労して、ようやく生きて日本に帰ってきたのに、アメリカ人と仲良くできるなんて。

あの頃の祭りは賑やかだった。大きな神輿が荒くれ者の大人たちによってあちこちに押しかけながら、掛け声をかけながら練り進んでいった。

ボクはその声を聞いただけで恐ろしくて、決して近寄らなかった。町の人は歓声をあげて、神輿の勇猛さを称え、喜んだ。

オヤジはボクが祭りに行けば喜ぶものと決め付けていた。だから、地元の祭りのときはオフク口と一緒に、大騒ぎしてボクを飾りつけ、街中へ連れ出すのだった。

ボクの格好は、祭りを楽しみにしている子どもそのものだった。祭りの半纏を来て白いパッチ、腰に祭のうちわを挿す。頭には豆絞りの手ぬぐいを巻き、足には、はだし足袋、鼻筋のうえにおしろいを塗る。典型的な祭姿の子どもであった。

此処で喜んで飛び跳ねて、オヤジとオフク口を引きずるように神輿に向つていけば喜ぶのだろうか。こんな事を心の中で考えながら

危険の無さそうな、金魚すくいとか、ヨーヨー釣りとかの前で立ち止まるのだった。

テケテケテン、ピーヤララーと、賑やかに山車がやってきた。これは博多の祭と違っておとなしく何人ものひとが引いている。賑やかだが安全だ。だからボクは好きだった。

雑踏は嫌いだ。そんな中に入ると、回りは大人ばかりで大きな体が壁のようにそそり立っているのだ。そんな時、神輿でもきたなら大変だ。そそり立った壁が、わーと迫ってくる。向こうではこつちが見えないのでうつかりすると跳ね飛ばされるか、人の間に挟まれてもみくちゃにされる。だから、ボクは神輿が嫌いだっし、祭りも嫌いだっし。

でも、夜店を歩くのは危険が無さそうだった。鳩笛とか綿菓子はいつも欲しかった。吹き戻しという名前だったと思うが、吹くと笛がなり先つぽの丸まった紙が延びるおもちゃだ。これも買っては喜んでいた。お面を売っているお店に來ると、オヤジはひよっとこのお面を買ってボクの頭にかぶせてくれた。少し斜め横にかぶるのが良いのだ。本当は横にあった少年探偵団の小林君のお面が欲しかったのだが、この格好に似合わないお面をねだることは出来なかった。今、振り返ると、つまらないことに気を使う子どもであった。

その頃に山梨にいた叔母が亡くなった。この人に、家庭環境が複雑だったオフクロが育てられた時期もあったようだ。どういう理由が分らなかつたが、ボクとオヤジで葬儀に行くことになった。

何線の電車に乗ったのか全く記憶に無いのだが、暗い夜道を親父と二人で延々と歩いた記憶がある。

周りを見渡す限り田んぼだった。遠くのほうに黒い壁のように見えていたのが山なのだろう。田んぼの中からうるさいほど蛙の鳴き声が続いていた。高圧線の鉄塔が真っ直ぐの道沿いに続いていたのが今でもはっきり覚えている。何時ごろだったのだろう。あの頃は夜中だったように思ったがそれほど遅い時間ではなかつたのかもし

れない。

「お父さん、もう一キロは歩いたのかな」

「もつと歩いたと思うよ。三十分か四十分は歩いたからね」

「こんなに沢山歩いたのは初めてだね」

ボクは元気だった。何キロであろうがキロとつく距離を歩いたことなど今までには無かった。何キロも歩くなんて、大人だって大変なことをボクはやっているんだと、興奮していた。家に戻ってから、何キロも歩いたんだと、自慢していた。

それからしばらく歩いて叔母の家に着いた。そこは禅宗の寺で叔母は住職の妻だった。

何人かの人たちで手打ちのうどんをついていた。ボクはそのうどんは温かいつゆに入れて食べるのだと思っていたら、食事の時にお膳の真ん中に盛ってあった。それを味噌汁に入れて食べるのだった。寺の人たちは美味しそうに「このうどんは良く出来ているね」などといいながら食べていた。ボクは初めての経験に戸惑いながらも食べてみたが、美味しいとは感じなかった。

庭に出てみると、裏のほうに若い男の人が穴を掘っていた。その人の背丈以上もあるような深い穴だった。ボクは穴の深さよりも定規で引いたように、きっちりとした四角に掘ってあるのに驚いた。

葬儀が終わり出棺になった。

おばあちゃんが祭壇にお供えしてあった団子を子どもたちに配ってくれた。食べてみると、うどん粉を練ったような団子で何の味も無いのだが、それがボクには美味しく感じた。

棺は竹で作った神輿のようなものに乗せられて、何人もの男の人たちが担ぎ上げた。庭を何週か回って、掘ってあった穴まで行き、静かにその中に下ろされたのだ。

ボクの記憶にある土葬はこの時が初めて最後だった。

オフク口は何故来なかったのか分らなかったが、叔母の死亡の知らせに取り乱し、涙を流していたのを覚えている。実の母親の死の

時には寂しそうにしていたが、ボクは涙を見た記憶がなかった。

オヤジは戦争の話をよくしてくれた。

それが、とつても面白かった。兄貴や弟と一緒に笑い転げて聞いていた。戦争の話なのにこんなに笑い転げて聞いてもいいのだろうか。なんて、思っているそばから、ボクは笑いがこみ上げてきた。

それは、まるで、あの頃、流行っていた伴ジュン、アチャコの「二等兵物語」のようだった。

オフクロは映画が大好きだったがオヤジは一緒に行くと、いつも寝ていた。でも、「二等兵物語」だけはよく観ていたのである。

苦しいこと、辛いことを笑いに替えて吹き飛ばしてしまう才能がオヤジにはあったのだろう。

陸軍にいたオヤジはラバウルの飛行場の警備に付いていたようだが、最後はニューギニヤに行き部隊が全滅して捕虜になり、戦後になって、オーストラリアの収容所から帰ってきたようである。

ニューギニヤに付いたオヤジの部隊は、そこで片道の食料を与えられ、敵との決戦に向わせられた。生きて帰る、見込みの無い出撃だったようだ。

それだけ命令すると、上の人達は舟に乗って日本に帰ってしまったようだ。その船が無事に日本に着いたのかは分らないそうだが。

それからは大変な戦いだったようである。最初のうちは部隊として敵と戦っていたが、どんどん味方が減り、食料はなくなり、ついには、散り散りになってしまったようだ。

オヤジは数人で山の中を彷徨っていたらしい。もう敵を倒すどころでなく自分たちが生きていくのに精一杯だったようだ。草でも、虫でも、蛇でも食べられそうなものは何でも食べたそうだ。

あるとき、アメリカ軍のキャンプを見つけ、そこにある食料をかっぱらおう、という事になった。昼間はじつと草陰に忍んで敵に見つからないようにしていた。暗くなり、アメリカ軍もあらかたの人が寝入ったのを見計らって、そつと倉庫に忍んで行き食料を盗んで

きた。皆で草むらで忍んでそれを食べたところ。コンビーフとかパンとかこの世のものとは思えないほど美味しかったようだ。

ところが、そんな立派な食べ物など食べたのは遠い昔の話。まして、コンビーフなど肉はめつたに食べない。途端に腹が下ってしまった。真つ暗な草むらに忍んでいるので、当然トイレなど無い。仕方が無いので少し離れたところへ行き用を足してくる。そしてまた元のところへ戻るのだ。戻るとまた腹がおかしいのでまた行く。でも、さっきのところでは用を足した残骸があるので少し違うところへ行く。こんな事を二三回繰り返すと、元のところも、用を足したところも、分らなくなってしまうのだ。何せ街頭もネオンサインも無い、月がなければ、真つ暗なのだ。月など出ているはずがない、月の無い夜だから成功したのだから。元のところに戻ったと思って横になると、身体の下には自分のウンコが在ったそうだ。

昼間、敵に見つかって、銃でうたれたときなど、逃げ足は凄く速さだった。崖の処に行き止った時などは、怖いも何もなくそのまま崖を駆け下りてしまったそうだ。

そんな事をしているうちに、オヤジは一人になってしまった。

ある日、ジャングルの中を一人で彷徨っている時、気が付くと原住民に囲まれていたそうだ。

原住民は囲んだ輪を少しずつ狭めてきた。最後は皆で一気に捕まえる気持ちだろう。もう、重たい銃はとっくに、なくなっていた。丸腰では勝ち目は無い。オヤジはズボンのポケットに手を入れた。そこにはさっき取ったバナナが入っていた。それを、ポケットの中でピストルのように持ち、そのふくらみを、回りに向けて構えると、狭まってきた輪がさつと広がるのだった。何度か繰り返すうちに、もう、騙しきれないと、ポケットからバナナを出して悠然と食べたそうだ。当然、捕まった。

オヤジはそれでも諦めず、持っていた鎖を彼らの酋長の娘にあげて、何とか気に入られて婿にしてもらおうと働きかけたのだ。

努力の甲斐もなく結局、アメリカ力軍に売り渡され、捕虜としてオ

「ストラリアへ送られたのだ。」

取調べの時、階級を言うのだが、ポケットにはたくさんの下士官の階級章が入っていたのだ。だから、自分は兵隊で身分はもつと低いのだと言ってもなかなか信じて貰えなかったそうだ。これは、昔から収集癖があつて、いろいろなものを集めていた。その癖で、死んでいた下士官の階級章を剥がしては収集していたとのこと。いたい、生きているのが不思議な状況で、何をしていたのだろう。そう言えば、うちには段ボール箱いっぱいマツチ箱が収集してあつた。

収容所では厳しい生活を強いられ、食べ物も満足に食べさせて貰えないと思っていたのだが、そんなことは全く無かつたようだ。

オヤジは、「アメリカ人は紳士だ、皆、良い人だつた」とボクに言っていた。

捕虜になつたおかげで生きて日本に帰つて来ることが出来たオヤジだつた。

(三)

オトウトが日本脳炎になつた。その頃のボクはそんな名前は聞いたことが無かつた。オトウトは高熱が出てうなされていて、床の間のある八帖間に一人で寝かされていた。そこは、他の部屋から少し離れていたの、隔離する意味でそこに置いたのだろう。オフクロは戦争中に看護婦をしていた経験からか、一日中付き添っていた。

当然、医者に往診を頼み来て貰っていた。

「日本脳炎ですね。本来は病院に入れて隔離しなければいけないのですが。どこも設備が良くないので隔離したら子どもさんは、死んでしまうかもしれません」

そういつて、看護婦さんを付けてくれ、密かに自宅で介護することにしてくれたそうである。この先生は「日本脳炎」の権威の先生だつたそうだつた。

先生はオトウトの背中に大きな注射をうっていたのを覚えている。注射の後が、お椀を伏せたくらいにぶっくりと膨れていた。まだ二歳の弟の背中全部が膨れていたように見えた。

オトウトは突然、床の間を見て泣き出した。

「ゴジラがそこにいる。こわいよ」

叫んでいる。そこにはゴジラなどいない。

オトウトは大きくなってから、その時のことを幻が見えたといっていた。

その幻は、時には二つ出現したり、違う場所に出現したりしたようだった。

我が家はオヤジが室内装飾業を自営しているので、オフクロも店に出てカーテンなどを縫っていた。帰りはしばしば遅くなり、オトウトとラジオを聞きながら留守番していることが多かったのである。その後、小学生になっても、オトウトは老婆や知らない人が床の間に立っている「幻」を良く見たようだった。そんな時は決して口に出さずにじっと恐怖をこらえていたようだった。そんなことを口に出せば、一緒にいるボクが怖がり取り乱すに違いないと思って止めたようである。兄思いのオトウトだから、怖がらせないように、との配慮もあつたのだが、隣で怖がると相乗効果で益々恐怖が募り。どうにもならない状況になることを恐れたようであった。

ともあれ、熱は下がり「日本脳炎」は誰にも伝染することではなく治つたのである。この先生がいなかったらオトウトの命はどうなつたか分からない。感謝の思いでいっぱいであった。

我が家ではそれ以来その先生が亡くなるまで、親子三代、吾が子も診ていただいていた。

オトウトが無事治つたとき、先生はオヤジとオフクロに

「助かったのだけれど、高熱で小学校の終わりごろか中学校までは、知恵が遅れると思ってください」

と言われたようだ。それ以来オトウトは、

「ぼくは、二ホンノーエンだから、べんきょうができないんだ」と、

いつも言っていた。

少ない友だちのなかに、やすのりちゃんがいた。近所の男の子だった。よく一緒に遊んでいたのだが、特別、好きでも嫌いでもなかった。ボクはそんなところのある変な子どもだった。

あるとき、なぜ、そんな事になったのか覚えていないのだが、やすのりちゃんが弟の顔に砂をつかんでぶつけた。オトウトは顔中砂だらけにして、大声で泣いていた。オトウトが言うことを聞かなかったのだろうが、ボクは怒った。オトウトは、まだ二歳なのだ。多少のことはある。

ボクはやすのりちゃんの腕をつかんで、背中にねじり上げた。これでボクの勝ちだった。あんまり上手くいったので自分でも驚いたほどだった。こういう敵と戦う時の業をボクは幾つも知っていたのだ。中学生で柔道もやっているアニキがボクと遊んでくれる時いつも教えてくれていた。もともと、本当に使うチャンスがあるとは思っていないかっただろうが。

やすのりちゃんは涙を流して泣いていた。すると、突然、やすのりちゃんのお母さんが出てきた。太った大きなおばさんなのだ。殴りこしなかったが、大声で、「うちの子に何するの」と怒鳴ったのだ。驚いて、ボクは手を離れたが、ボクに向かってさんざん怒鳴ったのだ。ボクは泣きたかったのだが、泣くのをこらえた。ボクは悪くは無いのだから。言うことを聞かないからと言って、小さいオトウトをいじめるのが悪いのだ。だって、オトウトは二ホンノーエンだったのだから。

ボクたち兄弟は仲が良かった。

ボクはいつも夢ばかり見ている子どもだった。

ご飯を入れる壊れたおひつがあった。それは、周りのたがは二センチ五ミリほどの幅の銅版でできていた。それを見たとき、その金物を使って剣が作れるな、と思った。王子様が持っている剣だ。こ

の銅版を平らに伸ばして、剣の鐔はこの銅版を短く切って付ければいい。剣の先つぽを尖がらせて、手の所には布を巻けばいいかな。なんて、考えている。そんな事を考え始めると、次々とアイデアが出てくる。そして、頭の中には王子様の活躍が浮んでくるのだ。

王子様のボクは剣を腰に下げて馬に乗って敵と戦うのだ。とつても強いボクは襲ってくる敵をこの剣でなぎ倒す。こんなことを考えていると、気がつく。部屋の中は真つ暗になっていることが良くあった。

おひつは、腰掛けるのに丁度良い大きさだった。腰をかけると、オフクロは「何をしているの。そんな所に腰掛けると、お尻が曲がってしまうよ」なんてよく言っていた。

それを聞くとボクは、お尻が曲がるってどうなるのかな、と考えた。随分変な格好になってしまふな、座るのに困るだろうな、なんて想像していた。だから、おひつには決して腰掛けなかった。

家の中で遊んでいることが多かったボクは、運動神経は良くなかった。それなのに、自分では走るのが速いと思っていた。ボクには必殺の走り方があったのだ。それを、「ロケット駆け」と命名していた。その秘密は、誰にも話したことは無かった。つま先で細かく足を動かして走るのだ。でも、そうやって走っても、いつも友達には追いつかなかった。今思うと不思議なのだがどんなに負けても、ボクは速く走れると信じていたのだ。ボクの頭の中では友だちを抜き去っている。

現実と夢の境が、あやふやになっていたのかも知れなかった。良く考えると、今も境目がおかしいかも知れない。

ボクは幼稚園に行くことになった。キリスト教の教会にある幼稚園だった。だから、日曜学校に参加しなくてはいけないので、日曜日も寄付金の五円玉を持って、幼稚園に行くのである。ボクは良く行くのを忘れそうになりオヤジやオフクロに自転車を送ってもらった記憶がある。今思うとそれはオヤジやオフクロも忘れていたので

はなかったのか。

幼稚園でのスナップ写真があった。サスペンダーのついた半ズボン、白いシャツ、頭髮はきちつと七三にわけ、髪が落ちてこないようにヘアースピンで止めている。なんという恥ずかしい格好だろう。漫画に出てくる「お坊ちゃまくん」そのものだった。ヘアースピンはボクも付けるのが嫌だった記憶がある。でも、オフクロが取ることは許さなかった。これは、いじめている訳でなく、この方が格好良いと思っていたのだ。そう思いこんだら一直線のオフクロなのだ。ボクには逆らう勇氣は無かった。

その幼稚園ではボクは一切口をきかなかった。声を発するのが恥ずかしかった。クラスの子と話すのはとても嫌だった。何故だか分らないが声を出すことは無かった。今思うと友達と話すと言うことは自分をみんなの前にさらけ出すような気がしたからだと思う。心の中ではボクは他の人より何でもできる子なのだと思っていた。

男の子は話をしないと周りから去っていくだけだが、女の子は違う。ボクに声を掛けて返事がないと、今度はほかの子が声を掛ける。それでも返事がないと、また別の子が声を掛けてくる。それでも駄目だと、みんなまでボクをからかってくるのだ。ボクの悪いところを見つけては騒ぎ立てるのだ。

ボクにはまずいことがあった。毎日、持って来るお弁当だ。その内容は大丈夫だったのだが、弁当箱がいけなかった。

アルマイトで出来た楕円形のお弁当箱。厚みも七八センチあった。詰めれば大人でも足りるくらいの大ささだった。ボクは男の子なので、楕円でなくて四角が良かった。厚みもせいぜい4センチくらいが良かったのだ。しかも、その蓋には赤い大きな椿の花が印刷してあった。これはいけなかった。オフクロはボクには可愛くて良いと考えて持たしてくれたのだが、赤い椿で楕円形はどうみても女の子だった。

みんなに騒ぎ立てられる。「あー。女の子みたい。女、女、女」

ボクはじつと我慢するしかなかった。

「この弁当箱は嫌だ」とオフクロに言えば良いのだろうが、そんなことはとても言えなかった。オフクロはこんな可愛いお弁当箱でボクは喜んでいと固く信じている。これは、今でもそう信じているのだ。信じ込んだら他人の言葉に耳を貸すことはしない。それがオフクロだった。

ボクはいつの間にか幼稚園に通わなくなったのだ。この頃にはまだ、五月病などという言葉は無かったが、その走りだった。

オヤジやオフクロに説得された覚えも無い。

「行きたくなかったら家にいれば」と言うスタンスだったようだ。

結局、ボクは幼稚園と大学を途中で止めて、卒業していないのだ。「知っていた？お父さん偉そうなこと言っているけれど、幼稚園と大学卒業していないんだって。ふふふ・・・」

今、子どもたちに陰口をたたかれているのである。

オヤジのお店は幼稚園のすぐ側だった。小さい店だったが、活気があった。オフクロはそこにあるミシンをいつもかけていた。ダダダとわき目も振らずにカーテンをいつも縫っていた。ボクが行くと、笑顔でこちらを見るのだが、一段落するまで、手を休めようとはしない。ボクはそうやってオフクロが働いている姿を見ているのが好きだった。

店でボクを相手にしてくれるのは、大概、オヤジだった。時間があると近くの風月堂に連れて行ってくれて、ケーキを食べさせてくれた。

「ショートケーキを食べるのだろう。飲み物は何にする？」

「温かい紅茶がいい。お砂糖はひとつ」

ボクは甘いものがあまり好きではなかった。特に和菓子のあんこが入っているのは駄目だった。だから、和菓子では、すあまか豆もちが好きだった。しかし、イチゴのショートケーキは大好きだった。風月堂でケーキを食べながら紅茶を飲むのがとっても好きだった。

我が家の庭の端の一角に土が盛り上がっているところが在った。横に五メートル、幅二メートル、高さ一メートルほどだったろうか。庭にあった池を掘った時の残土だったのだろう。

ボクたちはそこへ上ったり、ほじくったりして、よく遊んでいた。

そこからは骨が出てきた。ボクは犬か何かの骨だと思っていたのだが、北条時輔の乱など鎌倉時代にはこの辺も戦場になったのだろう。その頃には大飢饉もあって、たくさんの人が死んだようだ。大人たちは人の骨ではないかと思っていたようである。

おばあちゃんは其処に線香を立てて手を合わせていたこともあった。

本当のところは分からなかったのだが大人たちは不吉な感じがしていたようである。

そんな事だからではなかったが、ボクは大きな声でよく唄っていた。生きていたとは、お釈迦さまでも知らぬ仏のお富さん春日八郎の「お富さん」だ。意味など分らなかったが、ボクの得意の歌だった。ショートケーキには似合わない歌だがこの頃良く口ずさんでいた。

こんな家族のなかで育ったボクは、友達は少なかったがそれなりに楽しく過ごしていた。子どもには親の商売など全く分らなかったが、この頃から経営状況は良くなかったのだ。

子どもはどんな環境にいようと親が心配するほど気にしてはいない。

ある日、我が家にオフクロぐらゐの年恰好の奥さんが怖い顔をしてやってきた。オヤジの借金の返済が滞っているようで、催促に来たようだ。駄目だと分ると、勝手に家の中にあがってくるのだ。

家の中には、おばあちゃんとオフクロがいた。オフクロは何故かアイロンをかけていた。おばあちゃんは、唯、おろおろとしていた。

「払ってくれないなら、これも貰っていくからね」

女の人はラジオを抱えていた。おろおろしていたおばあちゃんは、必死に言った。

「そ、それは、子どもが楽しみにしているものだから、勘弁してください」

ボクは、そばで聞いていて、そんなに楽しみでもないけれどな、と心の中で思っていた。

「お母さん。いいのよ、何でも持っていつてもらって」

オフクロはアイロンをかけながら言っていた。

当然、オヤジはそんなところにはいかない。どこへ行ったのか誰もわからない。夜になればきつと帰ってくるのだろう。あの借金取りの女の人が、その頃にはもう帰っているのだろうから。

だんだん我が家の経済状況が悪くなってきた。そんな頃にボクは小学校に入学の歳になった。

第一章ボクと家族たち 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724z/>

ボクの起源（改定）

2011年12月2日20時56分発行